ベンサム

EE22-1293E 木村拓登

ほかの哲学者と比較した際に、理解がしやすいなと感じたのがベンサムやジョン・スチュアード・ミルの功利主義がわかりやすいなと思った。快楽を量として測るベンサムと快楽の質を重視するミルのどちらのほうに自分の考えが近いか考えたが、感覚としてベンサムに近いと感じたのでベンサムを選んでみた。

善い行為は何かと問われたときに自分ならなんて答えるかと考えたときに、より多くの幸福をより多くの人々にもたらす行為が良い行為であるという、ベンサムの最大多数の最大幸福の考えに近いと思った。

この考えは少数派を犠牲にする危険があるといいう指摘があるが、全員が全員幸福を感じられる行為など無いに等しいと思うし、良し悪しは人によって変わるものなので仕方のないことだと思った。ただ、少数派が犠牲になることや富裕層のみが利益を増大できればいいという不平等な社会が作られてしまうことには賛同できないと思った。

ベンサム功利主義はその行為が良いか悪いかという判断をするのは、すべて結果によって決まるとなっているが、それに関しては懐疑的ある。比較的にはその通りなのかもしれないが、授業で出された例として電車内で席を譲る行為が、老人に怒られて老人と自分互いに不快なため悪い行為となっているが、仮に若い自分でもせきに座れることはうれしいことであるし、老人であればなおさらうれしいと思う。例で出てきた老人は怒ったが、譲る側としては怒るか怒らないかの判断なんてできないので、結果はどうであれ譲ると声をかける行為自体は悪い行為ではないと思った。例で出てきた老人を少数派であったと考えれば、仕方がなかったと吹っ切ればよいと思った。